TEN
TAMA
てんたま
斐芝嘉和
表紙イラスト：あかめ
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『てんたま　前編』『てんたま　後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

斐芝嘉和
表紙／あかめ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アンジェリカ

天使候補生の小柄な少女。正式な愛天使になるべく煉獄へ研修にやってきた。

アシュタロス

アンジェリカの指導教官を務める堕天使。黒いローブを纏う妖艶な美女。

サリエル

アシュタロスと同じく指導教官を務める堕天使。金髪の美青年。

天国と地獄の狭間、仮初めの死地である煉獄(れんごく)に――。

ふわり、とひとりの少女が降り立った。

小柄で童顔の、人形のように愛らしい少女だ。

緩く波打つ金髪を小さな尻の辺りまで垂らし、冬の湖水のように澄みきった碧い瞳を不安と期待に揺らめかせ――あどけない頬が、限りなく白に近い薄紅色に上気している。薔薇の花びらを思わせる紅い唇が、幼気な決意を秘めて軽く引き締まっている。

冷たい石畳を素足で踏んだ幼気な少女は、ほとんど裸だった。

平らな胸から女のコの場所まで、丈の短い白絹の前掛けが辛うじて隠しているが、それも首のうしろと腰のうしろで軽く結わえられているだけ。ふわりと広がった金色の髪の間に薄い背筋がチラチラしている。その下、プリッとした小さな尻は完全に丸見えで、肌寒い空気に撫でられた瑞々しい柔肌がほんのり赤らみ、細かく粟立っていた。

(ここが、煉獄……)

少女――アンジェリカは、不安に蒼褪めた頬を仰向けて周囲を見回した。

道はすべて石畳、その左右に立ち並んでいる見上げるほどに高い建物もすべて灰色の石でできていた。さらに視線を仰向けていくと、街の上にのしかかっているのは空ではなく、見るからにゴツゴツとした暗褐色の岩の天井。

天国の門前町とも呼ばれる煉獄は、先輩天使から聞いていた通りの、巨大な洞窟の中に

ある大きな街だった。
それでいて、辺りは不思議なことに暗くない。
ひっそりと静まりかえった街路には、秋の日の、昼時を過ぎて夕暮れに差しかかるほんの少し手前のような、胸がキュウッと締めつけられるような清澄な薄明かりが満ちていた。風もなく、ヒトの声も聞こえず、透明な霧に包まれているようにすべてが静止している。
「ここが、煉獄……」
先ほどと同じ言葉を、今度は声に出して呟いてみた。
空気の微かな震えは静かな街路に吸い込まれ、消える。
呟きに応えてくれる者はなく、余計に寂しくなってしまった。
透き通っているように白い肩が、不安そうに震える。前掛けの裾を意味もなく弄っていた小さな手指が薄い布地を知らず知らず、ギュッと握り締める。幼気な顔がいまにも泣き出しそうに歪んだが、幼気な唇をクッと噛んでなんとかこらえるアンジェリカ。
（だって私、天使候補生だもん……ここでお勉強しないと、いけないんだもん……）
逃げ出したいくらい寂しくても、逃げてはならない——決意に頬を引き締めて、俯きかけていた顔をまっすぐ上げる。
二重瞼のパッチリした瞳とプニプニ頬っぺが愛らしい少女は、これでも一応、天使候補生なのだ。豊かな金髪に隠れて見えにくいが、背にはちゃんと、大人の掌サイズの白い翼

が生えている。

胸が膨らむ前に夭逝したアンジェリカは、天国にある天使養成校で百年間学んできた。座学のカリキュラムを終え、割り振られた役割は「愛天使」――煉獄で迷っている死者たちに愛を与え、昇天させるという、特殊な天使である。

正式な愛天使になるためには、先輩天使について実地研修を行わなければならない。そのために、この陰気な煉獄へやってきたのだが――と。

「こんにちは」

「ひゃっ⁉」

背後から声をかけられ、文字通り飛び上がって驚くアンジェリカ。背に生えた小さな翼が激しく羽ばたき、金色の髪を掻き回す。

慌てて振り返ると、いつの間に現れたのか、黒いローブを纏った妖艶な美女がすぐ目の前にスッと背筋を伸ばして立っていた。

濡れたようにしっとりと輝いている長い黒髪。細い身体を包み込んだ、夜闇のような漆黒のローブ。涼やかな微笑みを浮かべた顔は上品で、切れ長の瞳が美しい。高く形よい鼻の下では薔薇のように紅い唇が白い歯を見せて艶やかに咲きこぼれていた。

そして――背のうしろに畳まれている大きな翼は、鴉のように黒い。

（あ……堕天使、様だ……！）

天国には白い翼の天使しかいなかったから、本物の堕天使を見るのは初めてだった。
それにしても、なんと綺麗な女性だろう。全体にほっそりとしているのに、胸や腰回りには女性らしいボリュームがあった。整った顔立ちとそこに浮かんだ柔和な笑みは、修道院で暮らしているシスターのように落ち着いている。
本物の堕天使は、噂に聞いていたほど怖くはなかった――というかむしろ、意地悪だったりツンと澄ましていたりする普通の天使様より、ずっと優しそうだ。
「アナタがアンジェリカね？　私は堕天使のアシュタロス。アナタの指導教官です」
よろしく、と差し出された白い手を、アンジェリカはギクシャクとした動きで握った。掌に感じたのは、ひんやりとしてスベスベした、心地よい細指。おっかなびっくり力を込めると、背の高い堕天使は優しく微笑んでギュッと握り返してくれた。
（うはぁ、素敵……こんな素敵なヒトが、私の先生なのか……）
物静かで上品で、しかも優しげな――月光のように淑やかな女性。
先ほどまでアンジェリカの小さな胸を支配していた心細さは、吹き飛んでしまった。黒髪をなびかせた堕天使が背を向けて歩き始めると、そのスラリとしたうしろ姿にも思わず見惚れ、夢見心地でついていく。
やがて案内された場所は、教会のような建物だった。
（ここがお勉強をするところかしら……）

指導教官の美しさにポォッとなっていたアンジェリカは、再び不安な顔になる。本来は人見知りするタチなのだ。同期生で愛天使に選ばれた者はいないが、きっと先輩はいるだろう。上手くやっていけるだろうか、ちゃんと挨拶しなければ、意地悪なヒトじゃないといいのだけれど――などと、早くもガチガチになってしまう。

「さあ入って……あら？」

ポーチを上がって扉を開けたアシュタロスが、薄暗い内部を見透かしてわずかに眉を顰めた。その腰にしがみつくようにして恐る恐る中を覗き込んだアンジェリカも、

「あ……」

短く息を呑んで絶句。

教会の礼拝堂のようにガランとした広間、その中央に、高い窓から差し込む陽射しを受けて白く浮き上がっている円形の台が見えた。広さはテニスコート半面くらい。そしてその真ン中、大きなクッションソファに、気持ちよさそうに微笑んだ金髪の美青年が背を預けてくつろいでいた。

美女かと見間違えそうなくらい美しい青年は、ひとりではなかった。大きく広げた脚の間に、裸の少女が蹲っているのだ。

入り口に立つアンジェリカからは、恥ずかしげもなく突き上げられた形よい桃尻しか見えない。少女の頭は青年の股間辺りに揺れていて、その栗色の髪が、優しい手つきで撫で

その繊細な秘所が、美しい堕天使にじっくりと観察されている。
「イヤ、イヤ、ヤだぁッ！　やめさせてください、アシュタロス様ぁあっ！」
サリエルをチクチク責めていた指導教官ならきっと止めてくれると思ったのに、
「あら、どうして？　サリエルはアナタのお勉強を手伝ってくれるのよ？　アナタが愛天使候補生でなければ直接言葉を交わすことなど許されない智天使様が、直々に教えてくださると言っているのよ。もっと感謝してもよいのではなくて？」
先ほどとは打って変わって、堕天使を持ち上げるようなことを言う。
「そ、それはそうです、けど……こ、こんな、いきなり……あッ!?」
ぷにゅ――柔肉が軽く圧され、掻き分けられた。
幼い肉畝にヒタッと添えられたサリエルの細指がV字に開き、秘裂が割り開かれてしまったのだ。
「う……うぅぅ……ッ！」
鮮やかなピンク色の幼気な粘膜が、流れ込んできた冷たい空気にサワサワ撫で回される。
ソコは敏感で繊細な、エッチな気分になってしまう恥ずかしい場所。
自分でも妄りに触れないように注意しているのに、会ったばかりの美青年に弄られ、こんなにも露わに割り開かれてしまった――。
（いや、いや、いやぁぁあっ！）

試し読み スタート！

膨れあがる羞恥心に顔が赤らみ、息が上擦る。
喉が引き攣り、張り上げたはずの悲鳴が声にならない。
「おやおや、これはこれは……」
アンジェリカの幼い秘裂を覗き込んだサリエルがほんの一瞬目を丸くして――すぐに優しく微笑んだ。
「なんとも幼いオマ〇コですねえ。見なさい、アシュタロス殿。ビラビラもまだ、こんなに小さいですよ」
「あら、本当。ひとりエッチもしたことないみたいね」
ふたりの堕天使に見つめられたソレは、蕾というのも烏滸がましいほど幼気だった。紅いはずの粘膜は艶やかなパールピンクで、甘酸っぱい粘液に潤んでいなければ普通の肌と見分けがつかない。縦にふたつ並んだ小さな孔――尿孔と膣はほとんど同じ大きさで、薄い耳朶のような粘膜花弁が生えていなければどちらが花芯か分からないだろう。
割れ目の縁に色づいているはずの肉豆も、いまはまだ米粒ほどの大きさしかなく、細い莢にすっかり隠れているためいくら探しても見当たらない。
「我らが神も罪なことをなさる。これほど無垢な少女に愛天使などという大変な役目を授けられるとは……」
「心にもないことを。顔がニヤけているわよ」

アシュタロスの指摘に笑顔を返したサリエルが、白い肉畝から一旦指を離した。弾けるように戻ってゆるゆると閉じていく秘裂に、今度は紅い唇を寄せる。

「や、やぁっ！　ダメ……やぁンッ！」

――ぷちゅッ！　ちゅぱッ！

撫でるとじんわり心地よくなる柔肉に、小刻みに繰り返される軽やかなキス。

指先よりも柔らかな唇のプニプニした感触が気持ちよく、ほんの一瞬吸われた感覚は肌の裏側に染みついて残る。

（ヤなのに、恥ずかしいのに……うぅ⁉　ああ……どうして、どうして⁉）

堕天使のキスは、自分の指で触れたときより遙かに鮮烈だった。

あられもなく割り開かれた股間にチュパッ！　チュパッ！　と小さな音が立つたび、イヤだと思う気持ちが薄れていく。軽く押し当てられた唇に、羞じらいが吸い取られているようだ。

代わりに産みつけられるのは、そわそわむずむず、もどかしい気持ち。

もっとしっかり吸って欲しい、もっと強くキスして欲しい――生まれて初めて芽生えた淫欲に細い身体が操られ、小さな尻が小気味よく揺れる。剥き出しの細い肩やハの字に開かれた太股は羞じらいの薄桃色に染め上げられ、背後の美女の黒衣に広がった金色の髪からほのかに甘酸っぱい香りが立ち上る。

「あら？　ふぅん……さすが、と言うべきなのかしら？　愛天使に選ばれるだけのことはあるわね、女のコの匂いがしてきたわ」
「ふひゃっ⁉」
生温かくてヌルヌルした柔らかなモノが、耳の裏にペチョッと貼りついてきた。妖しく微笑んだアシュタロスの、唾液に濡れた紅い舌だ。
「や、ダメ……くすぐったいッ！」
首を竦めて抗うと、反対側の耳朶を舐められ、啄まれた。温かな唾液が肌に染み込み、キスを受けた秘部と同じようにムズムズし始める。
「こちらもですよ。ほら、一丁前に熟れてきました」
アンジェリカの股間から顔を上げたサリエルが、紅く染まった割れ目に指をかけてニンマリと微笑んだ。
「うぅっ⁉　く……ふぁ⁉」
再び割り開かれた秘裂が、熱く痺れる。薄紅色だった粘膜はすっかり赤らみ、唾液を塗(まぶ)されたようにヌメヌメ濡れ光っていた。耳朶のような花弁が厚みを増し、その奥で小さな膣が喘ぐように蠢いている。尿孔はキュウッと窄み――割れ目の縁には木の芽のような突起が、紅く染まった莢からほんのちょっぴり顔を覗かせていた。
「挿入(いれ)てはダメよ、サリエル。千年ぶりに現れた愛天使候補生なのだから。じっくり時間

をかけて、蕾を開かせたいの」
「アシュタロス様があとでちゃんと私を慰めてくれるのでしたら、いかようにも」
ニッと笑ったサリエルが、柔肉の畝を細い指先で押さえたまま、唇を寄せた。
「ふ、あ……うぅっ！」
赤らんだ肉膜に、軽い口づけ。
吸われた場所に熱い感覚が弾け、黒衣の美女に抱かれた小さな身体がビクン！　と鋭く痙攣する。
■い身体に電気を通されたようだ。うしろ手に縛られた細腕や大きく割り開かれた柔らかな太股が、自分の意思を離れて震え、勝手に捩れそうになる。
「やめ、や、やぁン……ッ！　そこダメ、ダメ、なのぉおっ！」
アシュタロスの柔らかな胸に頭を擦りつけ、伸び上がって悶えたのに、秘裂に押し当てられたサリエルの口はぴったりと貼りついてきた。微風に撫でられただけでも感じてしまう粘膜花弁が、尖った舌先にチロチロされる。舐められた場所から頭の天辺に向けて心地よい電流が走り抜け、意識が白く痺れてしまう。
「どうしてダメなの？　気持ちよくないの？」
「にゃぅ……ッ！」
甘い囁きとともに、真っ赤に染まった耳朶の縁がツゥッと舐め上げられた。首を竦めて

身を捩り、大きな乳房に支えられた背をうねらせるアンジェリカ。秘部の快感が伝染したように、耳が心地よくなってしまった。

この感覚は、知っている。

堕天使に舐められているアソコを指でクチュクチュすると、こういう気分になる――それはイケナイこと、恥ずかしいこと。そんなところを弄っているとバカになるわよと母親に叱られ、ソレを我慢できないのはいけないコですと神父に脅され――生前も死後も触るまいと必死に我慢していたエッチな場所が、いま、器用にくねる堕天使の舌に、ピチョピチョと舐めまくられている。

「ダメ、ダメ……バカになっちゃうぅうっ！」

叫ぶ声が甘い。

秘裂に挿し込まれた舌が閃くたび、頭の中が真っ白になる。オシッコの孔をせせられると背筋がゾクゾクッとして、膣孔を穿られると熱い感覚がヘソの下まで迫り上がってくる。小さな肉ビラを弾くように舐められると幼い秘裂がむず痒くなり、クリトリスをチュッと吸われると背中が鋭く反り返り、一瞬意識が遠退いてしまう。

「これがレッスン1よ、アンジェリカ。自分の気持ちに正直になりなさい」

「ふにゃ？　にゃ……はにゅぅンッ⁉」

膝裏を掬っていたアシュタロスの手が、平らな胸を覆った白い前掛けの下へ潜り込んで

きた。ほっそりとした指先に乳首を突かれ、ビクビクッと身を捩るアンジェリカ。
「な……なに⁉　なにしたですか、アシュタロス様ぁあっ⁉　やだ、ヘン……身体がヘンですぅうっ！　ビ、ビンビン、しちゃ、うぅうっ！」
「エッチな気分が身体中に行き渡って、よりいっそう感じやすくなったのよ」
耳元で囁かれた言葉が、理解できない。
温かな吐息にくすぐられた耳朶が甘く痺れ、細指にソッと撫でられた乳首には熱い電流が駆け巡る。サリエルに舐められている秘裂は心地よく蕩け、その感覚が下腹や太股にじわじわと染み広がって――身体のすべてが、トロリとしたスープになっていく。
「はふ、は……ふぅう……！　やら、らめ……ふにぁあンッ⁉」
手足の感覚が薄れ、身体がふわっと浮き上がるような錯覚を覚えた。
上を向いているのか下を向いているのかも分からない。
「う、浮くぅうッ！　飛ぶ、飛んじゃ……ああダメ、落ちる、落ちるぅうっ！」
涙に濡れた瞳には高い天井が映り込んでいるのに、アンジェリカが見ているのは眩い光。
秘裂に潜り込んだ舌先が、ぬちょ、ぴちゃ、と湿った音を立てて閃くたび、
「ふみゅぅうンッ！　ふぁ、ふあぁあっ！　あふ……にゃうあああッ！」
捩れる背筋に熱い突風が吹き抜ける。
昂っているのは、アンジェリカだけではないようだ。

小さな身体を抱き留めた黒衣の美女の胸が、深く大きく上下していた。
秘裂に感じている堕天使の鼻息は熱く、鞴(ふいご)のように激しい。
「イッていいのよ、アンジェリカ」
アシュタロスの囁き声に甘やかな響きが混じる。
耳朶をくすぐる吐息が熱い。
「にゃう、ぁあぁっ⁉　い、イくって、どこへ……ふあ、ああっ⁉」
耳裏が舐められると同時に乳首が抓られ、キュン！　キュン！　と引っ張られた。
「やえにゃえりゃぁあぁっ⁉　やら、やらやらやらぁあぁっ！」
快感の荒波に追い立てられ、痙攣性の鳴き声を上げて悶え狂うアンジェリカ。
気持ちよすぎて、なにがどうなっているのか分からない。
舌が縛れておかしな声になってしまったが、羞じらう余裕ももはやない。
「浮くぅう、飛ぶぅう……い、いクゥっ⁉　コレ、コレが、イくぅう……ッ⁉」
思いつくまま口走り、幼い顔を涙と涎で濡らして、汗ばんだ背筋をくねらせる。
「そうよ。それがイくってこと。さあ、おイきなさい！」
耳元でアシュタロスの声がして、尖端を押さえられた乳首がコロコロと転がされた。
莢から顔を覗かせた淫核にサリエルの鼻が擦りつけられ、処女膣孔が尖った舌先に穿られる。紅く潤んだ秘裂には柔らかな唇が押しつけられ、花芯の奥から溢れ出してくる愛蜜

アシュタロスの称賛に照れながら、アンジェリカは口の中に意識を向けた。
（見た目より、大きい……すごく熱いし、すごく硬くて……舌が圧し潰されちゃう）
顎が痛くなるほど口を開けているというのに、滑らかな肉塊は上顎と舌にグリグリ擦れていた。小さな口腔は生臭い肉棒に占拠され、縦に長く伸びきった頬の内側が切れそうなくらい硬いエラに揉まれている。
「あら、ダメよアンジェリカ。ちゃんと唇を締めて。涎が垂れてきたわよ」
「ぇおっ⁉　ン、ンん……」
初めての注意に慌てて唇を締めると、緩く捻れた淫茎が感じられた。
熱い弾力の奥に、鋼の硬さが潜んでいる。
限界が近いのか、ドクンドクンと脈打っている。
「よく聞いて、アンジェリカ。唇を窄めたまま、頭を上下に動かすの。先だけしか咥えられていないけど、今日はそれで十分だから」
「ンぇあ？　ら……らふぃろふぉふれふ、もっふぉおふまれ……」
「ダメ。喉奥まで導き入れるにはコツがいるの。無理にしたら、喉が壊れてしまうわ。千年に一度の逸材をこの段階で壊したくないのよ」
アシュタロスが真剣な顔で言った、そのとき。
「も、もう、ダメです！　許してください、アンジェリカ！」

試し読み（サンプル）
こちらからスタート！

しばらく静かにしていたサリエルが、アンジェリカの頭をガッチリ掴んだまま腰を激しく振り始めた。

「ンぷっ⁉　ぇお、ぇあっ⁉」

赤ん坊の握り拳ほどもありそうな亀頭に咽喉蓋が抉られ、舌の根がグリグリ揉み込まれる。閃く息苦しさに涙をこぼし、必死に身を捩って淫棒を吐き出そうとしても、頭を押さえられているために逃げることができない。

「吸って！　早く！　唇を窄めてオチンチンを吸うの！」

「ンっ⁉　ンぅ……」

――じゅっ！　じゅるちゅっ！

アシュタロスの言う通りにすると、サリエルの動きが変化した。喉奥を荒々しく突いていたペニスが口の中でくねり、小刻みに前後して、頬の内側や舌など柔らかな粘膜に硬い亀頭を擦りつけてくる。

（え……っ⁉　う、ウソ……やだ、大きくなるッ⁉）

もう限界だと思っていた亀頭が、ムクク――ミチチ！

口の中でさらに一回り大きくなった。

熱くて太くて生臭い肉棒に、幼い口腔が埋め尽くされる。ゴリゴリした裏筋に舌が圧し潰された。顎が痛くなるくらい開いているのに、捩れながら前後する淫茎に唇が捲り返さ

れ、細かく泡立った唾液が掻き出されてしまう。
じゅ、じゅる……じゅるるっ！
顎から喉へ垂れ落ちる涎を恥じて一生懸命啜ったのに、乱暴に動く淫棒に邪魔されてほんの少ししか吸い上げられなかった。
しかしゴクッと呑み込んだ唾液には、濃密な牡のエキスが混じっている。
荒々しく前後するペニスに揉みくちゃにされた舌にも、肉茎に滲んだ牡の味がイヤというほど擦り込まれていた。
（や、や……やぁぁンッ！　ヤなのにぃ、ヤなのにぃぃ……ッ！）
本当にイヤなのか、どうか――自分でも分からなくなってきた。
喉奥をヌボッヌボッと抉られるたび瞼の裏に白い光が閃いて、意識が飛びそうになる。
壊れてしまいそうなくらい乱暴に揺さぶられているのに、それがなぜか心地よく、頭がぼうっとしてしまう。
牡の昂奮に牝の本能が反応し、[redacted]い身体がいやらしく変化していた。
白い前掛けの下で桃色のポッチが健気に痼り、ズレ動く裏地に擦られて悦びの電流を発している。秘裂は潤み、割れ目の底で膣孔が喘いで、口で感じている太い硬さをコッチにも入れてよとばかりに甘酸っぱい涎を垂らし始めていた。
（なんか、コレ……ヘン……ひとりエッチのとき、みたい……）

徐々に膨れあがってきた淫悦に呑まれ、涙に濡れた頬を淫らに弛めて、荒波のようなサリエルの抽迭に身を任せるアンジェリカ。
――ぬぐぼっ！　ぬぐぼっ！　ぬぐぼっ！
抗う意思をなくした途端、淫棒がさらに深度を深めて幼い喉が奥底まで犯された。
アンジェリカの柔らかな食道粘膜をこじ開けて突き進み、咽喉蓋を弾いて口の中まで退き戻り、再び狭い喉の奥まで――。
（あ……あっ⁉　来る……ッ⁉）
口唇や喉の粘膜が、男根の芯に充満する熱いなにかを察知した。
怯え顔になったアンジェリカの肩を、
「もうすぐ出るわよ！　こぼしちゃダメよ！」
アシュタロスが励ますように叩く。
「むぇっ⁉　れ、れるっふぇ、なにふぁ……ンっ⁉　く……ンぅぅっ⁉」
堕天使の動きがさらに早まり、金髪に沈んだ指先が頭に喰い込むほど力を増し――。
ビュクッ！　ドピュピュッ！　ビュパパッ！
「ンンッ⁉　んぅっ！　ンーッ！　ンンッッ……ッ！」
口腔に、熱い粘液が迸った。
予想以上に勢いがよく、しかも量が多い。

「ぷふぇあっ⁉　え、えぉぉ……」
ネバネバした塊が喉奥に貼りつき、その濃密な苦しょっぱさに思わず涙がこぼれ出た。あまりにも凄烈な青臭さに吐瀉反射が起き、胃液が逆流しそうになる。
「出しちゃダメ！　呑みなさい！」
サリエルに掴まれて動かせない頭が、アシュタロスの小さな手に押さえられた。
「うぅっ⁉　う……く……」
――ゴックン。
鋭い命令に怯え、思わず呑み込んでしまうと、蕩けたチーズのように熱くてねっとりとしたダマが喉の奥を降りていく。気道が塞がれ、息苦しい。唾を呑んで薄めないと窒息してしまいそうだ。
「むぅぅ……じゅる、じゅちゅちゅ……」
涙目になったアンジェリカは口一杯にねじ込まれたペニスをしゃぶりつつ、懸命に唾液を呑み込んだ。喉がイガイガするし鼻の奥がツーンとするが、堕天使たちに頭を押さえられたままだからどうしようもない。
（うぅぅ……コレ、やだ……するんじゃなかった……）
煽てに乗って浮かれた自分を、バカだと思う。
こんなことをするのが愛天使ならば、一人前になんてなりたくない――が。

「ふぅ、はぁ、ふぅぅ……す、済みません、アンジェリカ……アナタのお口が、あまりに気持ちよすぎて、我を、忘れてしまいました……」

照れ笑いを浮かべたサリエルがようやく手を離し、蕩けた顔のままクッションソファに倒れると、イヤだという気持ちが少しだけ薄れた。

「あら？　珍しいわね。いつも憎らしいくらいに平然としているのに」

意地悪な目になったアシュタロスが、萎れていくペニスをピンピンと弾いても、サリエルはわずかに眉を歪めただけでうっとり微笑んだまま。

「やめてくださいよぉ……でも、アンジェリカがしてくれるのなら、もう一回くらい頑張れそうですよ」

「あんなに非道いことをしておいて、よく言うわね。精液をゴックンさせるのはもう少しあとにしようと思っていたのに。もうイヤでしょう、アンジェリカ？」

「い、いえ……」

思わず否定した自分に、アンジェリカは驚いた。

口端に垂れている白い涎を手で拭い、青臭い吐息を漏らすと、唇や舌にペニスの熱さ太さ、硬さや重さが蘇ってくる。

（イヤ……じゃ、ない？　どうして？　私……ドキドキ、したままだ……）

もう一度、試してみたい。

小さな拳を握り締め、覆い被さってくる胸を叩くが、
「大丈夫大丈夫、痛いのは最初だけですよ」
喜色満面、鼻息を荒げた金髪の堕天使は、幼気な少女の非力な抵抗など意に介さなかった。片方の手で肉茎を握り、角度を決めると、ゆっくり体重をかけ始める。
「ふひぃいいっ！　ひ、ひ……ぎっ⁉　ひ……ぁあっ！」
ぐ、ぐ――ぬぐちゅっ！
熟れすぎた苺のような亀頭が、小さな壺口を強引に潜り抜けた。
弾けた感覚は、激痛などという生易しいモノではない。
「ひは……ひ……はぁうぅぅ……ッ！」
万力のような力で肩を押さえつけられたアンジェリカは、細い身体を懸命にくねらせ、幼い顔を涙と涎でグチャグチャに濡らして、掠れた声で喘ぐ。
（裂ける、裂けちゃう……か、身体が……裂け、ちゃ……うぅうっ！）
悲鳴を上げているつもりなのに、喉が引き攣り言葉にならない。
「ほ、ほら……先がちゃんと、入りましたよ」
ヒィヒィと呻いている小さな天使候補生にのしかかったサリエルが、辛そうに眉を歪め、低い声を絞り出した。唾液のぬめりと愛液の潤みがあるとはいえ、淫棒をねじ込んでいる孔はあまりにも狭く、キリキリと締めつけられているのだ。

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

痛いのならやめればいいのに、
「く、ふ、うぅぅ……ッ！　この締めつけ、たまりませんな！」
無理矢理自分を励まして、さらに体重をかけていく。
ぐ、ぐ――ぐちちっ！　ぐビチッ！
「ひぅっ⁉　あ……ぎ、ひぃぃ……ッ！」
これ以上はない、と思っていた痛みが、さらに凄まじくなった。
破瓜の血を滲ませた壺口が限界以上に伸びきり、血の気を失って白くなる。
唾液に濡れた亀頭は愛蜜に濡れた狭い肉洞を強引にこじ開け、奥へ、奥へ――。
「あが……ンぎ……ああっ⁉　は……うぅぅぅ⁉」
ズズンッ！　と腹の奥底に重い衝撃。
ゆっくりと深度を深めていた肉棒の尖端が、とうとう膣奥に達したのだ。
（あ……あぁっ⁉　な、なに、コレ……熱い、硬い……グリグリ、され、るぅうっ！）
粘膜の壁に筒先を阻まれたというのに、ペニスはなおも突き進もうとしていた。
勃起男根をねじ込まれた壺口に炸裂した激痛は、小さな肉孔を錆びたナイフでギチギチと抉られているような痛みだったが、今度のコレはまるで違う。
真っ赤に灼けた鉄の棒で、腹の奥底をズン、ズン、と突き上げられているような――。
「ひぎっ⁉　はが……あぐぅうっ⁉」

重い衝撃が響くたび、アンジェリカは喉を反らして喘いだ。
腹が突き破られそうだ。身体がバラバラになってしまいそうだ。
あまりの痛みに意識が痺れ、もはやなにも考えられない。
「これ以上は、無理、です、か。ふぅぅ、仕方ありませんね」
涎を垂らして痙攣している少女を見下ろし、苦笑するサリエル。
だが、諦めたわけではない。
人形のように力なく手足を投げ出したアンジェリカにゆっくり覆い被さると、薄い背に腕を回し、優しくギュウッと抱き締めた。
「ふ……あ？　サリエル……さ、ま……？」
頬に厚い胸を感じ、意識を取り戻しかけたアンジェリカだが――。
「うぁっ⁉　きゃ……あうぅっ⁉」
少女を抱き締めたサリエルが横へ転がり、上下が反転する。
仰向けになった堕天使の腰を、小さなアンジェリカが跨いだ体位――騎乗位。
「ぎ、ひ……いぃいっ⁉」
角度を変えた肉棒に膣奥を抉られ、涎を垂らした唇から掠れた悲鳴が迸る。身体が真っ二つに裂けそうな激痛から逃れようと身を捩っても、深々と挿し込まれた肉の杭に幼い秘裂が縫い止められているから、ギチッ！　ミチッ！　と軋む膣洞がさらに痛くなるだけ。

「ぬ……抜いて、抜いて抜いて、抜いてぇえっ！」
「どうぞ。抜きたければ抜いてください。そのための騎乗位ですよ」
金色の髪を振り乱して叫ぶ少女に、仰向いた堕天使が笑いかけた。クッションソファを掻いている小さな足に軽く手をかけ、
「はぅっ⁉　く……ぁああっ！　動いちゃ、や、だぁああっ！」
意地悪く腰を突き上げる。
「お、お……おちんちん、がぁああっ！」
軋む膣孔を硬い肉棒に抉られ、突かれて、さらに涙をこぼすアンジェリカ。
震える背を丸め、サリエルの腹に手をついた。柔らかなクッションソファに埋もれていた膝を浮かせて、爪先立ちになる。
そのまま腰を浮かせば、肉の凶器から逃れられるはず――なのだが。
「くっ⁉　う……うぅうっ⁉」
太い肉棒がズルッとわずかに動いた瞬間、熱い津波が背を駆け抜けた。
腰骨が痺れ、手足から力が抜けて、せっかく浮かせた腰が落ちそうになる。
（な……なに、いまの……⁉）
それは、初めて体験した淫悦だった。
文字通り身を引き裂かれるような激痛にも、愛天使の資質を持つ身体が慣れてきたのだ。

「ふぁ、ふ……うぅぅ……」
サリエルのヘソを覗き込むような姿勢で最初の波をやり過ごし、どうにか意識を保ったアンジェリカだったが、再び腰を浮かそうとすると、また熱い感覚が弾けた。
「はふ……ッ!?」
先ほどはまだ、気持ちイイとは気づかなかったが、今度はハッキリと分かる。
(こ、コレ……ヘン……お腹が、ジンジン……しちゃうぅっ!?)
硬くむくれた肉瘤が、膣孔の奥でズリ、ズリ、と動くと、これまでに感じたことのない痺れが大きく膨れあがった。
ヘソの下が熱くなる。
腰から力が抜けてしまう。
「ふぁ、く……うぅ……ッ!?」
身体を捻っても、背筋を反らしても、ソレは容赦なく湧き上がった。
肉の悦びを知ったばかりの膣洞は、たくましい肉塊にほんの少しの余裕もなく、入り口から最奥部までギッチリと占拠されているのだ。
わずかに身を捩っただけでも、硬く張り出したエラにヒダヒダが掻き回される。無理に腰を浮かそうとすれば捩れた淫茎に壺口をしごかれ、心地よい電流が秘裂に溢れる。
「はぅ……くぅ……あぅぅ……ッ!」

往生際悪くもがいていたアンジェリカは、やがて、肉棒を引き抜こうとしているのかそれとも膣奥を抉らせようとしているのか、自分でも分からなくなってきた。
目的を見失った瞳がユラユラと揺れ、涎に濡れた野苺のような朱唇が妖しくわななく。
こぼれる呻き声に甘い響きが混じり――腰が勝手に、上下し始めた。
「うぁっ!? あぅ、やらぁあっ!? 違うのに、違うのにぃいっ！」
こんなことをしたかったわけではない、こんなことをしている場合ではない――わずかに残った理性が、自らの動きを恥じる。
だがもう、止められなかった。
ニヤついた堕天使の腰を跨いだアンジェリカは、前掛けに覆われた薄い胸を反らし、緩く波打つ金色の髪を狂ったように振り乱して、奔馬に跨がっているように跳ね回る。
「やぅ、ぁあっ!? あひぅっ!?」
身体を傾けると、雄々しくそそり勃った淫棒に膣孔の違う場所を抉られることに気づいた。予期していなかった快感に薄い背が反り返り、仰向いた顔が悦びに赤らむ。
「ね？ 私が言った通り、痛いのは初めだけだったでしょう？」
サリエルの得意げな声も、アンジェリカの耳には届かない。
（なんで、こんな……やだ、やだやだ、止まら、なきゃ……おかしく、な、るぅうっ！）
腹の奥底に次々と、熱い感覚が弾けていた。

弾むたびに上下する大きな亀頭に、ヌチヌチと揉みまくられる膣奥。
産みつけられる肉悦は自慰とは比べモノにならないし、クンニよりもさらによかった。
甘い声をこぼしてもがくたび、捩れ悶える背筋に清冽な突風が吹き抜け、意識がグイグイ押し上げられてしまう。
涙に濡れた瞳には、もはやなにも映っていない。
「はふぅ、はぅううっ！　あぅ、あぅ、あぁうぅうっ！」
逆る恥ずかしい声を止めようともせず、夢中で上下に跳ね続けるアンジェリカ。
ぐじゅぽっ！　ぐじゅぽっ！　ぐじゅぽっ！
捲れ返る膣孔からいやらしい音が噴きこぼれ、溢れた愛蜜が太い男根を濡らした。
奥の潤みが増すにつれ、小さな尻が振幅を広げる。
亀頭が抜け出そうなくらい腰を浮かせ、硬い尖端が膣奥に打ち当たるまで一気に尻を落とす。身体がバラバラになってしまいそうだった激痛は同じ強さの快感に代わり、
「ぇふぁあ、ふぁあ、ふぇあああ……ッ！」
アンジェリカの鳴き声を淫らに波打たせた。
「イきそうですか、アンジェリカ？」
「うぅっ⁉　う、うん、うぅうンぅうっ！　イきそう、イきそうぉおっ！」
だれのモノかも分からぬ声に、反射的に答えるアンジェリカ。

口に出してから、そうかイきそうになっているんだ私、と改めて気づく。
（こ、こんな、ことで……イくんだ……イッちゃうんだ……!?）
つい先ほどまで、あんなにヒィヒィ泣いていたのに――なんてはしたない身体なのだ、なんてエッチな資質なのだ――羞じらう気持ちが続かない。たくましい男根に膣奥を突き上げられるたび、瞼の裏に閃光が弾け、意識が切り刻まれる。
まとまった思考などできるわけもなく、
「イく、イくイくぅぅっ！　イきそうなの、イッちゃうのぉおおッ！」
痙攣的に鳴き叫ぶだけだ。
「いいでしょう、イかせてあげましょう！」
「ふぁっ!?　はぅ……ぁああっ!?」
ぐぐぽっ！　ぐじゅぽっ！
仰向けに横たわった堕天使が、腰の動きを強めた。
膣奥に炸裂する快感を自分でコントロールすることができなくなり、溢れ出す春声が驚きと悦びにはしたなく裏返る。
「やぅ、ああ、あぅァアァぁああっ！　らめ、やら、やらやらやらぁああっ！」
次第に速まる突き上げに、為す術もなく翻弄されるアンジェリカ。
膣奥を打たれるたび、脳裏に眩い光が炸裂する。

荒波に揉まれる笹舟のように小さな身体が翻り、小さな翼が激しく羽ばたく。紅く染まった顔がカクンカクンと揺れて、力の抜けた手足が震えながらくねり――。

「ンぁ……うぅっ!?　ハぎぃいいっ!?　ひ、ひ、ヒィいッ!?」

いままで以上の激感が、膣奥に響く。

鋼のように硬い肉クサビに、子宮頸管がこじ開けられているのだ。

淫悦の杭が腹腔を貫き、背を駆け抜けて脳天を突き抜けていく。

限界を超えた快感に頭の中が真っ白になり、全身が燃えるように熱くなって――。

グ、グ――グギチッ！

「にゃぎはぁああ――――っ!?　あひっ!?　ひ……ぁえぁあああ――――ッ!!」

細い肉管を突き抜けた淫棒に、とうとう肉室を抉られた。

新たに犯されたソレは、牝の淫悦を司るいやらしい器官――子宮。

繊細な粘膜壁がたくましい肉瘤にしごかれ、凄まじいばかりの痺悦が染み渡る。

「ぇあ、ぇあ、あぇぇぇ……」

朱鷺色に染まった眉根がふわっと開き、涙に濡れた瞳から理性の光が消えた。

わななく唇から涎が溢れて、伸びきった喉をトロトロと垂れ落ちる。

手足の感覚はすでになく、ヘソの裏側まで達した焼け木杭のような熱い硬さに意識のすべてが埋め尽くされる。

「お、お……おく……にぃぃ……おふぃ、んふぃ、ンぅぅぅ……」
「ええ、奥までしっかり入りましたよ。それにしても……くぅぅ、なんて締めつけですか、コレは！　熱いヌルヌルが、しっかり絡みついて、くるし……！」
それまで余裕を見せていたサリエルが、辛そうに眉を歪めて呻いた。
腹にぺったりと乗っている少女の細い太股を撫でながら、なにかをこらえているように、立てた膝をプルプルと震わせる。
感じやすい亀頭を子宮粘膜に包み込まれ、カリ首を細い粘膜管にギュッギュッと揉み絞られているのだ。淫茎に貼りついた愛天使の膣洞はぎこちないながらも熱烈に波打ち、浅いヒダヒダを健気に立てて、プチュプチュとキスの雨を降らせている。
「幼い顔して、なんといやらしいオマ〇コでしょう……御褒美をあげましょう！」
クッションソファに黒い翼を広げてバランスを保ったサリエルが、伸ばした両手でアンジェリカの細い腰を掴み、腰を力強く律動させた。
「ふぇ……ぇあっ⁉　あぇうっ⁉　あぇ、うぇあ、あぇうぇあエアゥぇあああああッ！」
ズンズンと突きまくられる、子宮。
熱い亀頭に掻き回された羊水が沸騰し、鋼のように硬い肉塊に突かれた粘膜が燃えて、膨れあがった淫熱に頭の底が炙られる。
（と、熔ける……熔けちゃ、ぁあ、うぅぅ……ッ！）

叫んだつもりなのに、声にはならなかった。
わななく唇から溢れ出したのは、涎混じりの甘え声だけ。
「はみぁ、やぇあ……あぎ、あひ、ンぇあああっ！」
なにを叫んでいるのか、自分でも分からない。
肉槍に突き上げられるたび身を捩り、涙と涎を撒き散らす。
振り乱された金髪は噴き出す香汗を吸ってしっとり輝き、捩れた前掛けの下で小さな乳首が春先の木の芽のようにぷっくり膨れあがる。
突き上げられるまま悶えているうちに、天地の感覚が薄れ――消えた。
自分がどういう姿勢になっているのか、どこをどうされているのかも分からない。
ただただ気持ちよく、快感に煽られるまま背を反らし、桜色に染まった手足をくねらせ、ガランとした広間に裏返った甘え声を反響させて――。
「やぇ、ああ、ひぅ……あっ⁉　あああああっ⁉　くるくる、きたきたぁ、ああ、あうぁあ、あヒ、あヒィいいっ！　あぇ、あえ、ぁぇあえあぁあああああ――――ッ！」
ビクンッ！　ビククンッ！
堕天使の腰に跨がった小さな身体が、雷に打たれたように反り返った。
意識も理性も、なにもかもが吹き飛んで――あとに残るのは、喩えようもなく心地よい温かな痺れ。

太い淫棒を呑み込んだ幼い膣孔がキュウッと絞まる。
痙攣する膣膜が肉茎を搾り、緊縮した子宮がむくれた亀頭をしゃぶり立て――。
――ビュクッ！
ビュパパッ！　どぴゅ！　どぴゅ！　どぴゅっ！
ヘソの裏側に鈍い衝撃が弾け、同時に熱くねっとりした感覚が溢れ始めた。
「にゃ……へ……ぁうぁあああ……」
一瞬驚きに歪んだ幼い頬が、すぐに淫らに弛み、恍惚の笑みへ変わっていく。
（なに、コレ……なんだか、分からないけど……き、もち……イィィ……）
すべてが吹き飛ばされてしまうような肉悦の荒波も気持ちイイが、それよりも、この腹の奥にじわじわと染み広がってくる温かな陶酔感のほうがずっとよかった。心も身体も、ビュクッビュクッと噴き出してくる熱いぬめりに絡め取られ、蕩けていくような――。
幼気な肉体の奥に秘められていた未成熟な牝の本能が、どぷどぷと注ぎ込まれる精液の熱さに呼び覚まされたのだ。
自覚していなかった心の虚ろが、白濁液に満たされていく。
もう、なにも要らない。
腹の奥底に膨れあがるこの温かさと、すべてが白く塗り潰されたような絶頂の余韻さえあれば、ほかには、なにも――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/